

使徒の働き14章 「困難な中における働き」

1A イコニオン 1-6

1B 反対における忍耐 1-3

2B 危険の回避 4-7

2A リステラ 7-18

1B 信仰の賜物 8-10

2B 祭り上げられる危機 11-18

3A デルベからの帰路 19-23

1B 死んだかに見えたパウロ 19-20

2B 励ましと建て上げ 21-23

4A アンティオキアへの帰路 24-27

本文

使徒の働き 14 章に入ります。前回、私たちは、ピシディアのアンティオケにおけるパウロとバルナバの宣教の働きを見ました。ある安息日にシナゴークで、イエスが約束の救い主であることを説きましたが、次の安息日にはほぼ町中の人たちがやってきました。その群衆に妬みを抱いたユダヤ人が口汚く罵りました。二人は、自分たちはだから、異邦人のほうに向かうと言いました。異邦人たちは喜びましたが、信じないユダヤ人たちが、神を敬う貴婦人たちと町の主だった者たちを扇動して、二人を迫害させて、その地方から追い出したのです。そして二人はイコニオンに向かったとあります。14 章は、その話から始まります。

イコニオンは、今はコンヤと呼ばれる町になっています。アンティオキアの遺跡から 160 ㎞ぐらいのところ、車でも二時間は、かかるところです。私たち夫婦は、去年 4 月のトルコ旅行、カッパドキアからコンヤを経て、ピシディアのアンティオケに行きました。その辺りは、地中海の気候とは全く異なり、ずっと気温が下がります。標高 1000 ㎞ぐらいあるところであり、タウロス山脈の麓にある地域です。トルコでも五本指に入る大きさの湖が二つあり、あまりもの湖水の鮮やかさと、延々と続く湖の大きさにうっとりなりました。こんなところを、パウロやバルナバが通っていき、また後に連なるテモテは、この地域の出身なんだろうな、と思うと感慨深くなりました。

14 章は、大きな町アンティオキアから離れて、こうした田舎の中に入っていきます。こちら辺り帯はガラテヤ地方です。ここに住んでいた人々は、元来、黒海北部にいた人々がやってきたケルト人の一派で、ローマ時代は「ガウル人」と呼ばれていました。主にフランスの方面に移り住んだのですが、この地域に分離して住み着いたそうです。紀元前 3 世紀には、ガラテヤ王国を作っています。今のトルコ人は、ウイグル人と同じ中央アジアから来た人々ですが、そのトルコに、髪の毛が赤毛の白人の人たちがいるそうです。もしかしたら、ガリア人の血が混じっているのかもしれ

ません。彼らは元来、騎馬民族で、馬と戦車をもって動いていました。エゼキエル書 38 章に、騎馬の大軍勢がイスラエルを攻めてくる幻がありますが、ガリア人がいたような地域からなので、当時の人たちにとっては、とても身近な光景だったかもしれません。

そのこともあってか、当時はかなり粗暴な人たちがその地域を仕切っていたようです。ローマの支配下にあったものの、盗賊も多く、治安が良くなかったと思われます。ユダヤ人や異邦人からの難以外にも、盗賊の難があったことをパウロはコリント第二 11 章で言及していますが(26 節)、こういったところで経験したのだらうと思います。そのような困難の中にあっても、なおのこと福音を伝え、生まれたばかりの教会を建て上げていく働きをパウロとバルナバは貫徹し、第一次宣教旅行を完了させます。

1A イコニオン 1-6

1B 反対における忍耐 1-3

¹ イコニオンでも、同じことが起こった。二人がユダヤ人の会堂に入って話をすると、ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。² ところが、信じようとするユダヤ人たちは、異邦人たちを扇動して、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。

「同じことが起こった」と言っています。ピシディアのアンティオキアと同じことが起こった、ということです。つまり、ユダヤ人の会堂で話をしました。すると、大勢が信じました。そこにはユダヤ人だけでなく、改宗者や神を敬う異邦人もいました。そして、信じようとするユダヤ人たちが妬み、異邦人を扇動します。この順序が同じだということです。前回学びましたように、神は、ユダヤ人に救い主を与えられました。けれども、ユダヤ人が拒みます。そのことによって異邦人に福音が届きません。しかし、神は元々、実は異邦人にも救いのご計画を持っておられて、ユダヤ人の失敗によって異邦人の救いを実行されます。不思議なご計画です。

「信じようとするユダヤ人たち」とありますね。信じられないのではなく、信じようとしていないのです。心を頑なにしているのです。パウロとバルナバの話は、素直な心で聞けば、確かにイエスが約束のメシア、救い主だと分かるのです。けれども、古い皮袋に新しいぶどう酒を入れると、皮袋が破裂してしまうように、彼らはその古い皮袋を壊されたくないと思って頑なにになりました。

そして、「異邦人たちを扇動し」とありますが、アンティオキアでも、神を敬う貴婦人を扇動していました。異邦人に及ぶ救いを宣べ伝えているのに、どうしてなのだろうか？と思いました。それは、ユダヤ人に限らず異邦人にも、肉の誇りがあり、律法主義に陥る素地があったと言えます。ガラテヤ地方で起こっていることなので、ガラテヤ書を思い出します。異邦人として神の恵みによって救われたのに、律法の行いに逆戻りしたことをパウロは嘆いています(4:9)。つまり、元々、律法を守っているユダヤ人と、その神に魅了された人たちが、改宗者や神を敬う人たちですから、異邦人が、ただ恵みによって、信仰によって救われるとする良き知らせは、都合が悪かったのだと思

われます。

そこで、扇動する者たちは異邦人たちに対して、逆に、「彼らは、神の律法を守るなど教えて、あなたがたが異教の生活に戻りなさいと言っている。」などと言って唆したのかもしれませんが。そして異邦人に対しては、「我々には神々があるのに、ユダヤ人の中で収めておけばよいのに、それを異邦人にも強要しようとしている。」と思ったのかもしれませんが。ユダヤ人の神はユダヤ人と改宗者に、異邦人は異邦人の神というように棲み分けしていたのに、イエスこそがすべての主であるという、悔い改めの呼びかけに耐え切れなかったのかもしれませんが。私たち日本人も、「キリスト教はアメリカの宗教。日本人でクリスチャンというのは、ちょっとアメリカ人ぽくなりたいたいマニアックな人たちのもの。日本人には神仏がある。」と棲み分けしているかもしれませんが、イエスが全ての人の主だと言われるものだから反発しているのに重なるかもしれません。

³ それでも、二人は長く滞在し、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。

ここが、大きな言葉です。「それでも」という接続詞ですが、「そういうわけで」というギリシア語が使われています。兄弟たちに対して悪意を抱かせるような扇動をしているから、だから、ますます大胆に、主にあって語ったのです。ここが大事です。パウロはコリント人への手紙第一で、「16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています。反対者も大勢いるからです。」と言っています。反対があるということは、ちょうどパウロが迫害を始めて、その後に回心したように、人々がキリストに降参をしていく印といってもよいでしょう。光が照らされたからこそ、暗闇を愛する者たちが迫害するのです。人々が、神との平和を持つために、人々との分裂が起こることは仕方がない面があります。なぜなら、その反対している人々は、兄弟たちに反対しているのではなく、本質は、兄弟たちを通して、自分自身が神に反発していることに気づくからです。迫害は、自分の良心の葛藤の問題だからです。

そして、「主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた」とあります。主が広げたいと願われているのは、ご自分のことばです。その言葉の確かさを示すために、しるしと不思議を行わせます。ここで大事なものは、「恵みのことば」です。ガラテヤ人への手紙に、彼らの様子が書かれています。「3:1-2 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」彼らは、みことばを、信仰をもって聞いているだけで、そこに、十字架に付けられたキリストが目の前に描き出された、という幻でしょうか、それを見たのです。そして御霊を受けたのです。信仰でみことばを聞いていただけで、しるしと不思議を見ました。コルネリウスの一家が、ペテロの語る主のことばを聞いている中で聖霊が与えられたことを思い出しています。みなさんも、信仰を持って聞くなかで御霊が与えられます。

2B 危険の回避 4-7

⁴すると、町の人々は二派に分かれ、一方はユダヤ人の側に、もう一方は使徒たちの側についた。

アンティオキアの時と同じように、町全体の人々が関わって来ています。二派に別れましたが、一方がユダヤ派です。先に話したように、モーセの律法の下で生きようとする派であり、異邦人はユダヤ人の神とは関わらないとしていた人々も加わっています。もう一方は、「使徒たちの側」であり、イエスこそがユダヤ人と異邦人を救う方であるとする人々です。

ここで、パウロとバルナバが「使徒」と呼ばれています。使徒とは、「遣わされた者」ということであり、アンティオキアにある教会から彼らは遣わされています。十二使徒がいますが、その他に主が任命された使徒たちがいます。パウロは、自分の使徒職について疑いをかけている人々がコリントの教会にいるのを知って、次のように言っています。「Ⅰコリ 9:1 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。」使徒であることの資格として、主イエスを見たことを挙げています。三日目に甦られたイエス様を見ていませんが、ダマスコに行く道で復活の主がパウロに現れてくださいました。それから、しるしと不思議を行うことです。「Ⅱコリ 12:12 私は忍耐を尽くして、あなたがたの間で使徒としてのしるしを明らかにしました。しるしと不思議と力あるわざによってです。」パウロは、十二使徒の中にいなかったため、使徒職について疑いをかけながら、自分たちに引き寄せようとする偽教師たち、ユダヤ主義者らが着いて来ていたので、使徒職を弁明しなければいけないことが多くありました。

⁵異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒にになり、二人を辱めて石打ちにしようと企てたとき、

⁶二人はそれを知って、リカオニアの町であるリステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、⁷そこで福音の宣教を続けた。

ユダヤ人が扇動したのですが、今は異邦人が主導して、辱めようとしています。ただ、石打ちにしようとしていますから、これはユダヤ人の死刑方法なので、ユダヤ人の知恵を得たのだと思います。そしてアンティオキアの時と同じように、その町の指導者たちに訴えて、その権力、力を使って企んでいました。先ほど言ったように、ローマの実効支配がそれほど及んでいないので、こんなことができたのでしょう。

それを二人は知って、難を逃れました。困難がある時にそこに留まることが重要であると同時に、無駄に危険にさらさないと言う知恵も必要です。そして、神は彼らの避難をお用いになって、他の地域への宣教を広げられます。かつて、エルサレムの教会でステパノが殉教して、逃げていく使徒たちによって福音が広げられたように、広がっていきます。それが、「リカオニア」という地方にある町々です。初めにリステラ、それからデルベ、そしてその付近の地方です。さらにガラテヤ地方の奥地に入っていきます。

2A リステラ 7-18

1B 信仰の賜物 8-10

⁸ さてリステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。⁹ 彼はパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、¹⁰ 大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。

リステラは、イコニオンから南西 40 キロメートルにあるところです。そこには、ユダヤ人の会堂がなかったのでしょうか、会堂で宣べ伝えたという記述がありませんね。そこで、集まって来た人々に語ったと言う可能性があります。ユダヤ人がほとんどいない中で、しかも改宗者でもない人たちに対してですから、聖書の知識もありません。そんな人々に語っていました。

そこに、「足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。」とありますね。かつての、神殿の「美しの門」にいた生まれつきの足なえのことを思い出します(3:2)。使徒たちは、ベテスダの池で 38 年間、足が動かない人をイエス様が立ち上がらせたことを思っていたことでしょう。

ここで、パウロが、自分に与えられていた御霊の賜物のいくつかを用いている姿を見ることができま。まず、彼が「パウロの話すことに耳を傾けていた」とあります。みことばを信仰をもって聞いているということが前提です。そこで、「彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て」とあります。ここで、パウロは「知識の言葉の賜物」が与えられていたのでしょうか。主によって、人に起こっていることを教えていただく知識のことです。ペテロが、魔術師シモンが聖霊を授ける力を金で買おうとした時に、彼が苦みに満ちていたことを指摘しました。そういった心の中にあることを、物理的に、人間的には知ることができないことを、主に教えていただいた知識です。そして、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言っています。大声で言っています。もしここで立たなかったら、パウロはペテン師です。けれども、起き上がるという信仰が与えられたのです。つまり、「信仰の賜物」をパウロはここで用いています。そして、これはパウロというより、この男のほうですが、「癒しの賜物」を受けています。「すると彼は飛び上がり、歩き出した。」とありますが、彼は神の癒しを賜物として受けました。そしてパウロは、「奇跡を行う力」も与えられています。

パウロが、コリント第一 12 章で、御霊の賜物を列挙しているところを見てください。「12:8-10 ある人には御霊を通して知恵のことばが、ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」主は、必要なその時に賜物を分け与え、ご自分の働きをすることのできる力を与えられます。

2B 祭り上げられる危機 11-18

¹¹ 群衆はパウロが行ったことを見て、声を張り上げ、リカオニア語で「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになった」と言った。¹² そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人だったことから、パウロをヘルメスと呼んだ。¹³ すると、町の入り口にあるゼウス神殿の祭司が、雄牛数頭と花輪を門のところを持って来て、群衆と一緒にいけにえを献げようとした。

パウロはギリシア語を話していて、この地方の人たちもギリシア語を解することができたと思いますが、ここでは彼ら現地に受け継がれていた言い伝えによるものであり、それで、現地の言葉で叫び始めたのです。「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになった」と言っています。これは、ローマの詩人オウィディウスが「変身物語」というところで書き記していますが、こんなことが言い伝えられていました。「この地を神々の父ゼウスが息子のヘルメスを連れて旅人姿で訪れたが、村人は負たちを冷たくあしらった。ただ一軒の貧しい小屋に住むピレモンとパウキス夫婦だけが宿を貸し心から温かくもてなした。ゼウスとヘルメスは、この夫婦を山の頂上に連れて行き、村を湖底に沈めて滅ぼしてしまった。」このギリシア神話の言い伝えを戒めとしていた人々が、バルナバとパウロが、ゼウスとヘルメスの再来だと思ったのです。

¹⁴ これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて群衆の中に飛び込んで行き、叫んだ。
¹⁵ 「皆さん、どうしてこんなことをするのですか。私たちもあなたがたと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。」

おそらく、宣教において、あらゆる困難の中でこれが最も大きな危機だったのではないかと思います。迫害を受けることよりも大きな危機、それは、神に用いられている器が祭り上げられて、神のようにされてしまうことです。バルナバが主神のゼウスにされましたから、ここではバルナバが率先しています、順番がキプロス島の時からパウロが先に出てきましたが、ここではバルナバが先に出て来ています。そして、「衣を裂いて」います。大祭司カヤパが、イエス様がご自分がキリストであることを告白した時に、衣を裂きましたが、激しい感情を表す時にユダヤ人は行います。ここでは、自分たちはあなたがたと同じ肉体を持った人間なのだと訴えたのです。

彼らが人間に過ぎないことを知らせるために、神は敢えて福音書において、弟子たちの肉がいかにかに弱かったのかを記させたのだと思います。使徒たちは、主の証しのためにしるしと不思議を行っています。彼らは弱き人間、罪ある人間なのです。恵みによってのみ、使徒として立っているのです。そして、ペテロが、ユダヤ人からの視線に気づきました。生まれつき足なえの男を立ち上がらせた時です、「3:12 どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」そして、イエスによって与えられる信仰が、この人を立たせたと証言しました(16 節)。そして、コルネリウスがペテロの前でひれ伏しました。ペテロは言いました、「10:26 お立ちください。私も同じ人間です。」主のしもべが、主の証しをしているので、まるで主で

あるかのように祭り上げてしまうのですが、もしそれを受け入れたら、すべてが台無しになってしまいます。ヘロデ・アグリッパ一世がカイサリアで御使いに打たれて死んだのも、ルカは書き記していますね。彼の演説を聞いている者たちが、「神の声だ」と言い始めたのです。「12:23 すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた。」

そして、語っているのはおそらくバルナバでしょう、彼はこう言いました。「そして、あなたがたがこのような空しいことから離れて、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。」そもそも、偶像礼拝から生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えているのです。パウロはローマ人への手紙で、偶像礼拝の空しさから福音を語っています。「ロマ1:20-23 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」私も思い出します、キリスト者になる前、美しい自然を見て、これがどうしても神々だと思えなかったのですが、それでもそう教えられていたのでそう信じようと思わせた自分がいました。ところが、すべてが神が造られたという真理を知って、今まで見ていた自然が全く異なる輝きを持っていました。自然は、神の栄光を現すために存在しています。それ自体が神々とするならば、パウロが言っているように、思いが空しくなり、鈍い心が暗くなっていくのです。

¹⁶ 神は、過ぎ去った時代には、あらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むままにしておられました。¹⁷ それでも、ご自分を証ししないでおられたのではありません。あなたがたに天からの雨と実りの季節を与え、食物と喜びでああなたがたの心を満たすなど、恵みを施しておられたのです。」

これまでの時代、過ぎ去った時代というのは、イエスを死者の中から甦られる前の時代ということです。この方が神の御子であり、すべての人の主であることが明らかにされる前は、そのままの道に歩ませたということです。けれども、証ししないでいたのではない。自分たちが恩恵を受けている雨と、それによって与えられた作物、その喜びが、神の恵みを証ししていると宣べています。難しい言葉で、後者を「一般恩恵」と言います。聖書に啓示されている特別な恵みは、「特別恩恵」とも言われますが、つまり、イエスこそが救い主であり主であるという知識に基づく恵みです。自然の中に、神の恵みが啓示されているということです。

バルナバまたパウロの異邦人への宣教は、このように会堂におけるものとはかなり引き下がって、きわめて初歩的なことを伝える宣教でした。聖書抜きにしても、神が教えておられることを指し示して、そして天地創造の神がおられることを伝えるのです。そのことを知った上で、救い主を神が遣わされたことを伝えます。これは日本人への福音伝道に大きな示唆を与えます。一般に知ら

れていることをもって、まことの神を指し示し、それからイエス様を宣べ伝えることです。初めから聖書知識のある人々ではないので、その基礎から教えていきます。

¹⁸ こう言って二人は、群衆が自分たちにいけにえを献げるのを、かろうじてやめさせた。

「かろうじて」というところに、バルナバとパウロがいかに苦心したかを感じ取れます。しかし、一難去ってまた一難です。次に、あの石打をするために、アンティオキアとイコニウムからやってきたユダヤ人がいるのです。

3A デルベからの帰路 19-23

1B 死んだかに見えたパウロ 19-20

¹⁹ ところが、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにした。彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

信じようとしないユダヤ人たちの妬みと執念は恐ろしいものです。100^{*}、200^{*}離れているところに、石打にするためにやってきたのです。「石で打たれたことが一度(11:25)」と、パウロはコリント第二で回想していますが、ここでやられてしまいました。そして、「群衆を抱き込み」とあります。先ほどまで彼らを神々に祭り上げていた人々が、今度は石打にしているのですから。けれども、偶像礼拝ってそういうもんだと思います。神の器を祭り上げる人も、期待が裏切られると、その人を非難し、引き下げることの急先鋒にガラッと変わります。

²⁰ しかし、弟子たちがパウロを囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバとともにデルベに向かった。

ステパノの殉教の時と同じように、弟子たちはパウロが死んでいるならば、埋葬しようと思っていたことでしょう。ところが、彼は立ち上がりました！ イエス様の復活の原理がここでも働いています。パウロは、「Ⅱコリ 4:10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」と言いました。私たちが、困難の中で自分に死んでいるとみなすことによって、十字架に付けられているとみなすことによって、その弱さの中でイエス様の命が確実に働くのです。

ここで死んでいるかのようにになっている時に、パウロは第三の天に引き上げられた、コリント第二12章に書いたことが起こったのではないかと見る人が多いです。「12:2-4 私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じです。3 私はこのような人を知っています。肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じです。4 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともでき

ない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。」聖書には、天が複数あって、「エペ 4:10 すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方」とあります。第一の天は、物理的な天空であり、第二の天は、空中に権威の持つ者がいるところ、サタンがいるところであり、第三の天がパラダイス、神の御座が置かれているところと考えられます。言葉に言い表すことが許されていない、つまり、それほど栄光に輝いており、人の理解の中に押し込むならば不法を犯すかのような、ものすごさということです。

パウロの強みは、天の栄光を知っていることでした。「Ⅱコリ 4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。」とてつもない苦難でも、それが軽くなるような重い栄光が、自分たちに与えられていることを知っているのです。

パウロは、神が御座を持っておられる第三の天にまで引き上げられたことが、石打にあった後、死んでいるかのようにになっていた時に起こったとみなす根拠は、この後に、彼に肉体のとげが与えられたことが書かれていることにあります。「12:7-10 その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。8 この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。9 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいきます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」パウロが起き上がった時には、ぼろぼろになっている肉体であった可能性があります。前回、マリヤの熱病によって目が見えなくなったと話しましたが、そうでなくて、この石打によって目が見えなくさせられたとも言えますね。そして、他にも肉体に傷があって、その弱さを身にまといながら、宣教の働きを進めて行ったと考えられます。

そう考えると、見方が変わりませんか？パウロはいかに力強く、まるで万能であるかのように錯覚してしまうのですが、見た目は正反対に、弱々しく見えたに違いありません。むしろ、その弱さの中にキリストの恵みが完全に現れ、弱さの中にキリストの力が覆います。苦しみの中にいる時に、それが神に見捨てられたのではなく、むしろキリストの恵みとその力が働いている、まさにその渦中にいて、弱さを誇る、つまり、弱さの中で神の使命を果たすことができるのです。

パウロは、自分を石打にしたリステラに、すぐに戻っていきます。驚くことです、彼の思いにあったのは、そこで信仰を持って弟子になった人たちのことです。肉体の弱さが、彼を留めることはありませんでした。これから、信仰を持った人々を励まし、建て上げる働きに関わっていきます。翌日に行ったところは、デルベです。

2B 励ましと建て上げ 21-23

²¹ 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、²² 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。

デルベは、リステラから 120 キロメートルぐらいのところ南東に行きます。パウロが傷だらけの体を引きずりながら、歩いて行ったと考えられます。ここは今は、近くの小さな町からも 20 キロメートルも離れていたところにあり、小さな人工の丘があるのみです。今、主要道路から離れていて、リステラと並んで見る機会にあずかれませんでした。当時も主要道路はほぼ今と同じところにあり、離れていたようです。ローマのガラテヤ属州にありました。

そこで福音を宣べ伝えたら、「多くの人々を弟子と」したとあります。福音を聞いて信じるだけでは不十分です。イエス様は、弟子たちにご自分がしたように教え、それを守るようにさせていくよう命じられました。「マタ 28:20 あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とみなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」イエス様の命じられたことをすべて、守るように教えるのです。これは、主ご自身の生涯に、行いによって示されていたことです。イエス様に近い者、イエス様に倣う者、ついに行く者として、その生涯を生きていくということです。

そして、デルベから実は、パウロの故郷であるタルソまでは、250 キロメートルぐらいの距離で、タウロス山脈のキリキアの狭谷を通って行けました。これで、私の伝道の生涯は終わったと思わなかったのです。信仰へと導くと同じぐらい大切な働きである、フォローアップ、つまり信仰に留まり、励まし、そして教えていく働きを、既に信じた人々に行っていきます。リステラ、イコニオン、そしてアンティオキアまで引き返しました。

ここで言及しておく必要があるのは、16 章 1 節を見ますと、パウロの信仰の息子になるテモテは、リステラの人だということです。第二次宣教旅行でテモテを連れて行きますが、テモテはリステラ、いやその前のイコニオンでの働きから既にいたのかもしれませんが。そしてパウロについて行って、リステラで死んだようになっていたところを、テモテも見えていた可能性があります。パウロはテモテへの第二の手紙で、彼にこのように話しています。「3:11 また、アンティオキア、イコニオン、リステラで私に降りかかった迫害や苦難に、よくついて来てくれました。私はそのような迫害に耐えました。そして、主はそのすべてから私を救い出してくださいました。」パウロ自身、自分に驚いています。よくもこんな迫害に自分が絶えられたのだろうか。それは、主が救い出して下さったからだと言っているのです。そう、これが苦しみの中で耐えている信仰者の姿です。自分でも驚きます、なぜなら、主が救い出して下さっているからです。

そして、午前中見ていきました、励ましの言葉、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみ

を経なければならぬ」ということです。信仰者には、はっきりとした目標地点があります。神の国であり、そこにおられる王キリストであります。その方の御前に出て賞をいただきます。この方にひれ伏し、仕えます。これが私たちの目標です。しかしそこに入る前には、地上において苦しみがあります。それは、ここが悪魔の支配するこの世であるからです。しかし、その苦しみをも神は用いられて、私たちの内にキリストを形造り、練り清められるのです。

²³ また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。

パウロとバルナバは、弟子としていった後に、次に行ったのは「教会ごとに長老たちを選んだこと」です。教会を建て上げ、治める者たちを選んでいきました。ここまでやって、宣教の目的が達成されます。福音を伝え、弟子とし、教会を建て上げます。

長老とは元々、そのまま「年老いた者」という意味です。旧約時代において、モーセが率いるイスラエル人たちの長老たちがいきました(例:民数 11 章)。長老を立てて、その家、その教会を治めさせるのです。秩序と平和が与えられるべく指導者を立てていくのです。パウロとバルナバは、そうしたイスラエルの共同体の長、新約時代にもユダヤ人には「長老」が存在していましたが、そのままそれをイエスを主として集まる教会にも踏襲し、信仰を持った者たちの中から選びました。使徒 6 章にある、七人の給仕で働く者たち、執事たちがいきましたが、彼らの霊的資質が問われず。テモテ第二 3 章に、監督の職につく者の資格が列挙されていますが、その資質です。「3:6 信仰になったばかりの人であってははいけません。」とありますから、もしかしたら、元々、シナゴークで会堂司をしていた人でイエス様を信じた人が任されたかもしれません。これらの資質を見分けるために、パウロとバルナバは、主のみこころを求めて、断食して祈っています。

そして、興味深いのは、「彼らをその信じている主にゆだねた」とあります。あまりにも多くの人たちが信じ、また彼らが去って行かなければならず、十分に整えたという自信がなくとも、それでも、「主にゆだねた」のです。興味深いことが、ジーザス・ムーブメント、つまりイエス革命で起こりました。麻薬中毒になっていたけれども、信仰を持ち立ち直ったヒッピーの若者たちを収容する、「奇跡の家」というのを、カルバリーチャペルは運営しました。次々と若者が信じていくので、全く住むには狭くなりました。ある時は、お風呂のバスタブの中で寝ていた子もいたそうです！それで、そこを管理していたジョン牧師は、「君たち、まだ信じて数週間しか経っていないが、人がどんどん信じていく。君たちは出て行って、聞いたことを伝えていきなさい。君たちは伝道者だ。」として、送り出していったそうです。それこそ、「主にゆだねた」ということを行いました。

4A アンティオキアへの帰路 24-27

²⁴ 二人はピンディアを通過してパンフィリアに着き、²⁵ ペルゲでみことばを語ってからアタリアに下り、

²⁶ そこから船出してアンティオキアに帰った。そこは、二人が今回成し終えた働きのために、神の

恵みにゆだねられて送り出された所であった。

彼らは行った道を戻ってきました。前回ペルゲに来た時は、御言葉を語ったという記述はありませんでしたが、その時にマルコがエルサレムに行ってしまったのですが、帰る時は御言葉を伝えています。そこは港町ではなく、さらに川を下流に行き、アタリアという港町があります。今も観光などでにぎやかな町です。そこから船出して、ついにシリアのアンティオキアに帰ってきました！おそらく、一年半ぐらいの旅だったのではないのでしょうか。当時は E メールも携帯電話もありませんから、連絡と言ってもほとんどしていなかったでしょう。今のような伝達技術がなかったころ、カトリックの宣教師が日本に来た時は、数年かけて戻るような、気の遠くなるような宣教旅行でした。

しかし、神の恵みは私たちを成功させます。「二人が今回成し終えた働きのために、神の恵みにゆだねられて送り出された所」とありますね。神の恵み、自分たちには受けるに値しないけれども、好意を寄せられているその神によって送り出されました。それこそが、彼らが働きを成し遂げる秘訣となりました。

²⁷ そこに着くと、彼らは教会の人々を集め、神が自分たちとともに行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。²⁸ そして二人は、しばらくの間、弟子たちとともに過ごした。

宣教報告です。これはとても重要です。送り出す時に、彼らが手を置いたことを思い出してください。それは二人と自分たちはいっしょなのだということを示すものです。ですから、彼らに語ることは自然なことであり、しなければいけないことです。私もいつも、カルバリーチャペル・コスタメサには報告を入れて、祈ってもらっています。報告は、第一に、神が共におられたことです。第二に、異邦人に信仰の門を開いてくださったことです。アンティオキアに起こったことが、彼らの行くところでもどンドン、開かれたということです。

そして彼らは、少し休みます。弟子たちと共に過ごしました。宣教の働きには、休憩が必要です。そして主が次になされることを待つのです。